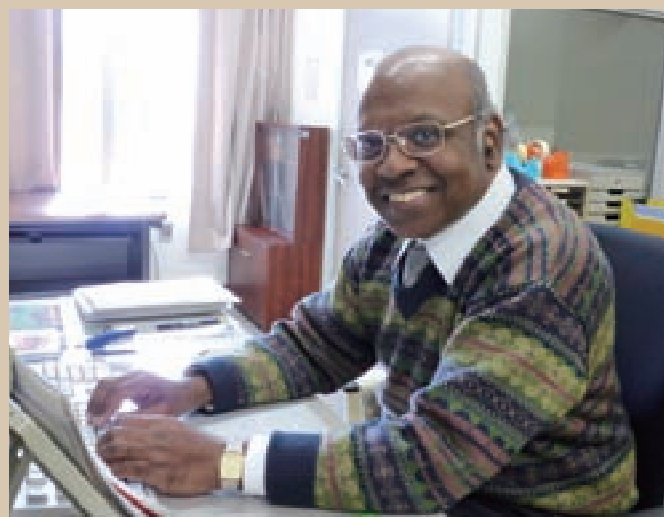




「アンゲリア」はギリシャ語で「ニュース・伝言・メッセージ」という意味です。

平成22年10月1日、より一層の英語教育充実のため、教養教育推進センターに英語を専門とする特任准教授二名が着任されました。平成24年度から英語講義のコマ数の増加など、様々な教育改革が行われていく予定です。今後の教養教育推進センターでの英語教育の展望や、学生の皆さんへのメッセージとして、お二方それぞれより一言いただきましたので、ご紹介させていただきます。



スリカンタ・サチタナタン先生

## 'Towards the Future'

by Sachithanatham Sri Kantha

While I taught Scientific English at the then Faculty of Agriculture (now, Faculty of Applied and Biological Sciences) during 2000-2002, I provided a class exercise to students, to write briefly about 'What is Truth?' in English. The objective was to instill an understanding on the concept of truth. The reason for the exercise: eruption of a few scandals in Japan and in other countries, relating to scientific integrity. Among the 80-odd responses that I collected, quite many were stimulating, entertaining and thought-provoking. I provide two examples below [grammatical errors in

the original are not corrected.]:

"Truth is nothing. Because truth doesn't have a definition. People are different from each other in thoughts. So, people are different from each other in truth. Writing in newspaper is not all truth. And the judgments are not all truth. In short, truth is nothing."

"I think the truth is like a ghost. Everybody knows this word. But nobody can say clearly what this is. Each people has their own vague form of truths. Although the truth often helps people, it also hurts them. And the truth sometimes disappears. After all, the truth is a ghost."

Originality was there. But, it deserved some polish. That should be the main function of a university teacher. Whether one agrees with these views or not, I felt that as a teacher one has to guide these students in their self exploration of the society, world and universe.

What is good teaching? I particularly liked the definition of 'good teaching' as provided by Donald Rinsley [Science, August 27, 1971, v. 173, p. 768]. "A good teacher is a person who provides far more than textbooks or lectures; he [she] offers himself as a model for his [her] students' identification."

Providence had helped me to be familiar with three cultures; namely Sri Lanka (first 28 years), USA (6+ years) and Japan (23+ years). Having taught and researched at the Faculties of Science, Medicine and Agriculture in nine universities in the past, I look forward to my rejuvenation of commitment to the students of Gifu University. Bertrand Russell, the British polymath (a mathematician, philosopher, pedagogue, social activist and a Nobel literature prize laureate) is my intellectual idol. He was also a tri-linguist, adept in English, French and German. It is a pity that Japan hasn't developed an intellectual in the caliber of Bertrand Russell in the 20th century. My mission is to stimulate the younger students to aim for the highest goals reached by Russell and other scholars of his caliber.

I understand that each student who enters Gifu University is a special person, having distinct talent and skills. Like what the lyric of Shimakura Chiyoko's hit song '人生いろいろ 男もいろいろ女だっているいろいろ' states. My work and hope is to polish these jewels to be productive to the society at large.

## これからの英語教育

長尾 裕子先生

去年の10月から教養教育センターで英語のカリキュラムの改革などに携わりはじめてから3カ月余りが過ぎ、少しずつ今までに学んだことから私なりに将来への抱負を述べたいと思います。

現在、日本の大学生は1年入学前に英語学習で3つの段階を経てきます。第一段階は中学入学前(これは小学校での英語教育や子供の英語教室などを含む)、第二段階は中学3年間、第三段階は高校3年間(浪人をする場合はそれも含む)です。つまりみなさんは最低でも7から8年間は英語に接していることになるのです。

しかし、日本人の大学生のみなさんには、学んだ英語を最大限に利用し、将来にそなえて、さらにスキルアップをしようという意識が少ないようにみうけられます。つまり大学入学後は、英語が必修であるので単位さえ取得できればいいという意識が多くの子にあり、達成感や満足感などを求めたり、自分の英語力を向上させようという気持ちもあまりないままに1年を過ごしてしまう人達が多いということなのです。

現在の共通教育の英語は、教養教育の一環として位置づけられており、その先の専門につながるような授業を行うことは義務付けられてはいません。しかし、私はそこに問題があるのではないかと考えます。大学入試という大役を果たしたみなさんが、4年間継続する意欲を持って語学に取り組むために以下のことを提案します。

1. 受験英語との決別
2. 英語への違った角度からのアプローチ
3. 全学共通から専門への橋渡し
4. 時代に即した教育的アプローチ

1と2では、受験という目標がないので、範囲のあるなかでの学習方法ではなく、多方面からの英語へのアプローチを試み、様々なスタイルで語学を習得する喜びを感じて欲しいと思います。

3が私が最も今の共通教育に欠けていると感じている点です。専門教育課程に入る前に、それぞれの専門で必要となる英語への導入部の役割を全学共通が果たせれば、学習意欲も増すのではないかと思います。

4は、ITの時代になってから特に言えることなのですが、世の中の変化も激しくなり、情報量も膨大に増え、過去の新情報がすぐに古くなり、語学教育(特に教科書)でもそういった現象への対応が急務です。そんな時代に生きるみなさんに合った教育を構築していくのも私たちの役目であり、授業をより魅力的なものにしていくことが私たち教師への課題だと考えています。

以上の点をふまえ、4年間の英語教育が、個々の点として存在するのではなく、一本の線(それも太い)として繋がれば岐阜大学の英語教育は飛躍が遂げられるのではないかと思います。私もその一端が担えるよう努力をしていこうと思っています。



講義中の長尾先生

## 編集後記



教養教育推進センター 執行部  
(奥から小澤副センター長、  
福士センター長、竹内副センター長)

今年の正月も箱根駅伝に釘付けとなった。体力そして精神力の限界ぎりぎりのところで闘いを繰り広げる筋書きのないドラマは、多くの人々に感動を与え、勇気を育む。駅伝の魅力は何となくタスキリレーに象徴されるチームプレーだ。1秒遅れれば、後続のランナーが1秒を縮めるために苦しむことになる。音声としてはよく聞こえないが、監督と選手とのやりとりも興味深いに違いない。監督は1秒でも良い結果を引き出すためにいろいろと工夫して選手に語りかけているようだ。往路復路の選手は十人十色、それぞれの性格を知り尽くしての協働作業だ。周囲の声援も背中を押してくれる。大学も1年1年がリレーされていく。駅伝と違うのは卒業まで一人で走らなければならないことだ。目標から1秒遅れれば、その分は自分でカバーしなければならない。そして、私たちにできることはランナーに声援を送ること、そしてベストを引き出すための協働作業のように思われる。

編集責任・教養教育推進センター 副センター長 竹内 豊英